

笠竹

栽培

〔箋注倭名類聚抄竹〕吳都賦劉注引異物志云射筒竹細小通長丈餘亦無節可以爲射筒、
 〔倭名類聚抄竹二十〕答竹 唐韻云箇音含字亦作答竹名也、

〔農業全書九木〕竹

竹をうゆる地は、高くして平かなる所、山の麓谷川近き所の、黃白軟の地に宜しとて、尤肥て性よく、沙がちなる和らかなる地、濕氣のもれやすきを好むと知べし、うゆる法、正二月、一かぶに三本も五本も多く立たるを、はちを廣く付て、廻りの根をよく切る物にて、さけくだけざる様に切廻し、末をも枝をも少づゝとめで、屋敷内ならば、東北の隅に地を廣くほり、根先の方を西南の方にひかせ直にうへて、土をおほふ事五七寸、風に根のうごかぬ様に、三方よりませをゆひをくべし、踏付かたむる事なけれ、踏付る事竹をうゆるに甚いむ事なり、尤活付までは切々水をそゝぎ、其後牛馬糞、麥稻のぬかなどをいかほども多く入べし、竹は取分あけ土の浮たるにうへて、盛長早き物なり、又竹はうへてわきより棒にてつきたるはよし、手風に觸、又は手足を洗ひたる汁、女の面など洗ひたるあか汁をかくれば、盛長せずして却て痛み枯る物なり、又月庵と云古人が竹を栽し法は、溝を深くほり、乾馬糞を泥にませ一尺ばかりもをきて、夏は間をうとく、冬は玄げく、三四本を一かぶとして淺くうへ、肥たる土を以ておほひ、泥土をかけ、ませを二通りゆひて、根の土をばきびしくうち堅むべからずと云り、又竹林の南の方の科をほり取、此方にて北の方にうゆれば、根必南にさすゆへ、よくさかゆる物と云り、雨の中か、雨を見かけてうゆべし、若西風の時はずやべからず、竹にはかぎらず諸木も皆西風にうゆる事は忌物なり、又諺にも竹をうゆるに時なし、雨を得て十分生と、又竹を栽るは五月十三日、是を竹醉日とも、竹迷日とも云て、此日竹をうゆれば、百活うたがひなく、即さかゆる物なり、又必五月にかぎらず、毎月廿日竹をうへて皆活共云り、又正月一日、二月二日、三月三日、是も又よく活る物なり、又辰の日は毎月うゆべしとも云り、